様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　４日現在

機関番号：３２４０１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2009　～　2011
課題番号：２１３２０００８
研究課題名（和文）
　ヘーゲル世界史哲学にオリエント世界像を結ばせた文化接触資料とその世界像の反歴史性
研究課題名（英文）
　Sources of cultural contact related to the image of the Orient in Hegel’s philosophy of world history and the anti-historical aspect of that image.
研究代表者
　神山　伸弘（KAMIYAMA　NOBUHIRO）
　跡見学園女子大学・文学部・教授
　研究者番号：60233962

研究成果の概要（和文）：
ヘーゲルの世界史哲学講義(1822/23)については、本邦では、その世界像を結ぶための文化接触資料が必ずしも明確でなく、そのオリエント論に対する評価も低い。この事情を批判しながら、本邦ではじめてその資料源泉を探求しつつ本講義を翻訳し訳註を付するなかで、ヘーゲルのオリエント世界像は、ヨーロッパに映った近代オリエント世界像として反歴史的な空間的併存を示すとともに、ヨーロッパ的普遍史を脱却する歴史的理解も示しており、これらを通じて――ロマン派批判も込められたかたちでの――オリエントとヨーロッパの相互承認関係を展望していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
Concerning Hegel’s series of lectures on the philosophy of world history (1822-23), it is not clear what sources he used for his image of the world, moreover Hegel’s discourse on the Orient is held in low esteem. While critiquing these circumstances, we explored the sources and made an annotated translation of Hegel’s lectures. As a result, Hegel’s image of the Orient exhibits both the anti-historical conceptual coexistence of the image of the modern Orient as reflected in Europe, as well as the understanding of history free of the ancient and medieval “universal history of Europe.” As a result, it has become clear that Hegel held a critical attitude toward the romantic school, and moreover recognized the mutual cogniscience of the Orient and Europe toward each other.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010 年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2011 年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
総　計	12,800,000	3,840,000	16,640,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・「哲学・倫理学」
キーワード：ヘーゲル、世界史哲学、オリエント、文化接触、世界像、反歴史性、ロマン派、相互承認

１．研究開始当初の背景

ヘーゲルのいわゆる歴史哲学に関する従来の研究が次のような重大な欠落を抱えてきたとの問題意識があった。

(1)ヘーゲルの「世界史哲学講義」において「オリエント世界」の占める位置づけが特筆すべき大きなものであるにもかかわらず、この議論への正面からのコミットが放置されている。――実際のところ、ヘーゲルは、この講義において、「世界史の進行」という具体的な世界に関する叙述全体のうちほぼ前半すべてを「オリエント世界」に費やしている。この事実は、自由の意識がより展開されたギリシア以降の世界よりも、むしろ自由の意識が実体に埋没しているとされる「オリエント世界」に対して強い関心が抱かれていたことを示している。――しかし、ヘーゲルの「オリエント世界」観については、たとえば、「彼は古代東洋の叙述から歴史哲学を開始するが、それは結局ヨーロッパの歴史の準備段階として位置づけられるにすぎない」と評価され、事実に反し低く見積もられてきた。この認識が是正されるべきである。

(2)ヘーゲルの「世界史哲学講義」の資料源泉は、本邦では学術的に未解明の領域に属する。――この講義翻刻が出る以前の歴史哲学の「オリエント」論に関しては、E. Schulin, *Die weltgeschichtliche Erfassung des Orients bei Hegel und Ranke*, Göttingen 1958 があり、若干の資料源泉への言及も含め、ヘーゲルの「オリエント世界」観を概括している。講義翻刻では、とりわけ「オリエント世界」の部分に詳細な註が付され（実に註解 77 頁中 75 頁相当)、資料源泉を明らかにしようとしている。しかし、本邦では、従来から、ヘーゲルの歴史哲学を資料源泉の解明に立脚して堅実に研究する方法がとられておらず、その成果が存在しない。

(3)ヘーゲルの「オリエント世界」論の射程が西洋と日本においてまったく明確になっていない。――ヘーゲルの歴史哲学に接近する従来のあり方は、ヘーゲルの自由観に発して、一般には、フランス革命やプロイセン改革などの近代化の捉え方に照明を当てるものであった。――しかし、今日的には、西洋の「オリエント世界」像そのものが思想的に問われており（サイード『オリエンタリズム』)、ヘーゲル自身のそれにいかなる位置づけを与えるべきかが重要な哲学的課題となっている。また、オリエントの一員である日本自身の自己理解を考えていくとき、たとえば西田幾多郎や田邊元などの京都学派におけるヘーゲル受容において、その「オリエント世界」観がどのように消化されていったのか精査される必要も出てきている。――このことの解明が、西洋と日本の文化的な対立を乗り越えるものとなる可能性がある。

２．研究の目的

本研究は、ベルリン期のヘーゲルが「世界史哲学講義」を中心として展開した歴史像のうち、その第一世界たる「オリエント世界」の議論構造を、ヘーゲルが用いた資料源泉を究明することを通じて哲学史的に解明するとともに、ヘーゲルが抱いた「オリエント」観を当時の文化接触のなかでの議論状況や影響関係において哲学的に重層的に評価することを目的とする。

すなわち、ヘーゲルの最初の「世界史哲学講義」を翻刻した *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte*, Berlin 1822/23, Nachschriften v. K. G. J. von Griesheim, H. G. Hotho u. F. C. H. V. von Kehler, Hrsg. v. K.-H. Ilting, et al., G. W. F. Hegel, Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte, Bd. 12, Hamburg 1996 で伝えられている「オリエント世界」の記述を中心にしながら、必要に応じて、1825/26 年の「哲学史講義」における「オリエント哲学」(a. a. O., Bd. 6, Hamburg 1994, S. 365-400)の議論、1824 年及び 1827 年の「宗教哲学講義」における「直接的宗教」(a. a. O., Bd. 4, Hamburg 1985, S. 144-281, 419-532)にみられるオリエントの議論も考察することにより、次の諸点を解明する。

(1)哲学史的には、ヘーゲルが活動した当時の文化接触上の資料源泉を、世界史哲学の個々の議論レベルで明確化する。

(2)哲学的には、ヘーゲルの議論の通用性を当時及び今日の議論水準で測定する。

(3)西洋や日本の他の「オリエント世界」観の特質をヘーゲルとの対比で解明する。

ヘーゲルの「オリエント世界」論は中国やインド、ペルシア、エジプトの広範な領域を対象とするので、3 年間を研究期間とする本研究では、以上の全体構想を実現するためにさらに具体的な目標を次のように設定した。

(1)ヘーゲルの言及を精確に理解することを促進するために、最初の世界史哲学講義の序論と「オリエント世界」に照準を当て、あわせてその翻刻註解の研究を行う。

(2)ヘーゲルが参照しえた資料源泉とオリエント側の一次資料を比較・対照し、それらとヘーゲルの議論との関連性（正確性・時代制約性など）を明確にする。――このために、翻刻註解の追試的検討と、資料源泉の補充的探索に踏み込む。そのさい、ヘーゲルの蔵書目録も参看しつつ、ヘーゲルの着目可能性を検討する。

(3)ヘーゲルの議論(前記 1)と資料源泉(同 2)とを突き合わせるなかで、またヘーゲル以外の思想家との対比において、オリエント論

の特質とそこに占めるヘーゲルの位置づけを吟味する。――ヴォルテールの中国論、クロイツァーのオリエント論やそれをめぐる論争と関連づけて当時における哲学的位置づけを明確にするとともに、日本におけるオリエント像、また今日の西洋におけるオリエント理解の地平からいかなる意味を有するかについて検討する。

３．研究の方法

(1)研究代表者及び研究分担者並びに連携研究者は、当初、ヘーゲル研究者５名、オリエント研究者４名、日本及び西洋近現代哲学研究者２名、合計 11 名からなる学際的なものとした。――ヘーゲルの「世界史哲学講義」は、４つの地域（中国、インド、ペルシア、エジプト）に分けることができるので各地域にヘーゲル研究者をそれぞれ充て、オリエント分野ではそれぞれの地域の専門的研究者（エジプトはヘーゲルの資料参照の実態からギリシア研究者があたる。）を配置し、さらに研究代表者と日本及び西洋近現代哲学研究者が「全体像」を検討した。

(2)ヘーゲル研究者５名は、「世界史哲学講義」及び哲学史･宗教哲学における前項各領域のテキストの訳出と分析をするとともに、対応するオリエント研究者と協力して資料源泉の探索と検討を分担する。

(3)オリエント研究者４名は、「世界史哲学講義」の議論に接するなかで、対応するヘーゲル研究者と協力して資料源泉の探索と吟味をするとともに、当時及び今日における「オリエント世界」に関する議論を検討してヘーゲルの議論の通用性を測定し、さらにその哲学史的・哲学的含意を検討する。

(4)研究代表者並びに日本及び西洋近現代研究者は、本研究課題の全体像を検討する。とくに、日本及び西洋近現代研究者は、日本または西洋のそれぞれのパースペクティブから他者を見る形で検討し、日本及び西洋の哲学的思考の特質を明確化するなかで、相互交流の可能な地平を探索する。

(5)散在する研究代表者及び研究分担者並びに連携研究者が日常的に問題意識を共有しながら研究課題に従事するために、すでに研究代表者が本研究課題に関連して設置済みのサーバ機器等によってインターネットによる情報交換を推進し、研究成果の公開にもこれを利用するとともに、年に３回、研究者を一堂に会した研究会を開催する。

４．研究成果

本研究の意義と、その予想した結果と、その実際とは、次のとおりである。

(1)ヘーゲルの「オリエント世界」論がヨーロッパ 18・19 世紀当時の文化接触的なオリエント認識に深く規定されていることを資料源泉に即して本邦で初めて浮き彫りにするという意義がある。

本研究の結果、「２．研究の目的」で掲げた「世界史哲学講義」の序論と「オリエント世界」（中国・インド・ペルシア・エジプト）論の翻訳を完遂するとともに、翻刻註解の追試的検討と資料源泉の補充的探索を大きく推進して訳註を付し、その成果を公刊した。

すなわち、「ヘーゲル：1822/23 年「世界史哲学講義」抄訳註」石川伊織・神山伸弘・久間泰賢・栗原裕次・権左武志・柴田隆行・橋本敬司・早瀬明訳、『ヘーゲルとオリエント』（研究成果報告書）、2012 年、407-683 頁。

この訳註では、ヘーゲルが確実に着目した資料源泉を相当数参照指示したが、なかでもとくに注目すべき以下の文献を研究協力を得ることによって訳出し、それぞれについての「資料紹介」も付して前掲『ヘーゲルとオリエント』で公表した。すなわち、

① 『書経――中国の一つの聖典』アントワーヌ・ゴービル訳（1770 年）――ジョセフ・ド・ギーニュ（Joseph de Guignes）による序文――、酒井智宏訳、石川伊織・井川義次訳注、273-294 頁。
② ジェイムズ・ミル『英領インド史』（1820 年）――第２編第５章　税――、色摩泰匡訳、295-315 頁。
③ J・A・デュボア『インドの人々の特徴、風俗、習慣、および、宗教制度、行政制度の記述』（1817 年）――第３部第３章ヒンドゥー教徒の寺院とそこで行われている儀式について――、赤石憲昭訳、317-342 頁。
④ フリードリヒ・シュレーゲル『インドの言語と叡智について』（1808 年）――第２巻　哲学について　第２章　輪廻転生と流出の体系、第３章　占星術と原始的な自然崇拝について――、小島優子訳、343-353 頁。
⑤ J・F・クロイカー『ゼンド・アヴェスター――ゾロアスターの生命の言葉』（1776 年）――古代ペルシアの教義の簡潔な叙述（抄）――、早瀬明訳、355-363 頁。
⑥ フリードリヒ・クロイツァー『古代民族の象徴と神話』第２版（1819 年）――第２編第１章§4　イシスとオシリス――、三重野清顕訳、365-386 頁。
⑦ ペーター・フェデルセン・シュトゥール『自然国家の没落について』（1812 年）――第１の手紙――、小井沼広嗣・滝口清榮訳、387-405 頁。

また、ヘーゲルとオリエントの関係を研究するために参照することの不可欠な最新の研究成果から学ぶために、公開講演会を開催し、その内容と討論及び資料を、前掲『ヘーゲルとオリエント』で次のように公刊した。

① 赤松明彦「1820 年代のヘーゲルとインド哲学」(2010 年 9 月 12 日、京都外国語短期大学)講演と質疑・資料、161-218 頁。
② 井川義次「朱子学の西伝」(2011 年 3 月 21 日、跡見学園女子大学文京キャンパス)講演と質疑・資料、219-263 頁。

さらに、前掲『ヘーゲルとオリエント』において文献目録を次のようにまとめた。

① 柴田隆行編「ヘーゲルのオリエント論・参考文献目録」、687-712 頁。
② 神山伸弘編「ヘーゲル蔵書販売目録から抜粋 、713-716 頁。

なお、当初は、資料源泉の補充的探索にあたって講義翻刻の編集者から教示を受ける必要があるとの認識を持っていたが、インターネットにおける古書の利用可能性が格段と進むなかで、その必要性が薄れ、すべて我々の手で探索することができた。

(2)このような成果を出すなかで、ヘーゲルの「オリエント世界」論が次のような特質をもっていることが明らかになった。

①まず、ヘーゲルの「オリエント世界」論は、時間軸では古代に位置するが、実は空間的な近代ヨーロッパに映った「近代オリエント世界」像にほかならない、という予想を当初は立てていた。

本研究の成果を踏まえると、ヘーゲルの「オリエント世界」論には、基本的に 2 つの構成部分があり、ペルシアから始まりエジプトに接続する「本来の歴史」については、古代そのものの資料に依拠して議論されるが、それに先立つ中国とインドについては、古代からの不変性という論理と、ヘーゲル的な現代における現状論とが結合することによってなりたち、それらは、「近代オリエント世界」論であるとともに古代世界論でもあるという二重性をもちあわせるものであることが判明した。

②「オリエント世界」論が近代論であるということは、同時に、ヘーゲルの「歴史哲学」の時間性を疑わせる結果（「反歴史性」）を生むことになる、という予想を当初は立てていた。これによれば、ヘーゲルの「歴史哲学」は、一般に自由の意識の「時間的」進展とみなされるが、自由について異なった捉え方をする意識の「空間的」な並存というイメージこそが実像に近いことになる。

これについては、前項の結果を踏まえれば、「空間的」な並存が中国とインドについて認められるが、そのことをもって「反歴史性」とまでいいうるかについては、議論の余地を残している。ただ、少なくとも、ヨーロッパにおいてその当時でもなされていた聖書主義的な普遍史理解との対比では、ヘーゲルが明確に中国とインドをより古い世界であるとみなしていることだけは確かである。

③ヘーゲルの進歩史観が「空間的」に展開されたとき、覇権的な「世界史的民族」とそれ以外の世界との関係が主奴関係となるのか（「奴隷視」との和辻の指摘）、相互承認関係となるのか、が一大論点となるが、「オリエント世界」論へのヘーゲルの沈潜は後者を支持する結果になるだろうと当初は予想した。

ヘーゲルの「オリエント世界」論が進展するなかで、実体への埋没から主体の形成に向けた論理が解明されているという展開が認められるが、他方、この論理関係に実在的なつながりがないと言明される点で、オリエントのそれぞれの世界は並存的状況にあることが認められる。この意味で、オリエントにおける実体への埋没という評価をもって、自己意識的な自由の進展した民族によるオリエント支配の正当化とならないことが明白になった。また、とりわけ中国やインドの不変性の認識や、仏教徒を自由の民族として承認することに基づけば、ヨーロッパはオリエントのあり方をその異質性のままに承認せざるをえないという理解をヘーゲルが示していることもはっきりした。

(3)ヘーゲルの結んだ「オリエント世界」像がヨーロッパ 18・19 世紀当時のオリエント理解とともに総体として浮かび上がるなかで、日本独自のオリエント理解と西欧におけるオリエント理解の一致、不一致が明確になるという意義も本研究は持ちあわせていた。

これについては、オリエントの思想の根底にある「無」の思想と西洋の「存在」の思想とが、ヘーゲルにおいて同一次元で交流している事態が明確になるという結果を当初から予想した。

ヘーゲルは、ゲーテのペルシア贔屓や、F・シュレーゲルらロマン主義のインド憧憬との関係で、オリエント思想とそれに対する西洋の評価・対応について不断に注意を払っていた。その意味で、オリエントにおける「無」の思想をどのように位置づけるのかは、ヘーゲルにおいて重大な意味を持っていた。本研究では、「無」に関するヘーゲル的な取り扱い方と、日本では西田哲学、西洋ではショーペンハウアーのそれとの対比をするなかで、ヘーゲルが「無」の抽象性を超えて「存在」に向かおうとする明確な志向性をもっていることが明らかになった。

この点に関わって、日本及び西洋の近現代哲学研究者は、日本または西洋のそれぞれのパースペクティブからヘーゲルのオリエント論の特質を検討し、相互交流の可能な地平を探求した。これは、ヘーゲル的には、おそらく「魂の不死」をめぐっていかなる思想なり宗教なりをもちうるのか、ということになるのではないかとの見通しがある。この点は、今後の研究課題として展望したい。

(4)以上のような成果は、ヘーゲルの「世界史哲学」としての歴史哲学に対する一般の

見方を一新する画期的な意味を持つと思われる。なぜなら、従来は、オリエント論抜きに自由の展開しきった近代のみを論じて充足しえたかもしれないが、今後は、オリエント世界論も含めたかたちで歴史哲学を考究する必要に迫られるからである。

また、この成果を導く研究方法が文化接触の資料源泉に即している点でも、「世界史哲学」をめぐる今後の研究方法を刷新するものである。というのも、ヘーゲル自身が、あくまで歴史の事実性に依拠して「世界史哲学」を把握した以上、たんなる概念的な自由の展開論としてのみ歴史哲学を理解するのでは、その真意に迫ることができないからである。これとのかかわりで、その資料源泉への通路を本研究が開墾したことの意味は大きい。けだし、ヘーゲルの「世界史哲学」においてさらに考究すべき事柄に容易に接近する方法がここに明示されたからである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１８件）

① 石川伊織、1822/23 年の「世界史の哲学」講義における中国の取り扱いについて、『ヘーゲルとオリエント』（研究成果報告書）、査読無、2012 年、15-38 頁。
② 板橋勇仁、ヘーゲル「世界史哲学講義」と西田幾多郎のインド論――Abstraktionと絶対否定――、前掲書、査読無、2012 年、147-157 頁。
③ 神山伸弘、ヘーゲルの「世界史の哲学」におけるオリエント世界とそのインド世界の位置づけ、前掲書、査読無、2012 年、39-52 頁。
④ 神山伸弘、オリエントの事実認識から紡ぎ出される実体性の内部プロセス――ヘーゲルのオリエント論がもつ特質の資料源泉からみた全体像、『跡見学園女子大学文学部紀要』、査読無、第 47 号、2012 年、15-22 頁。
⑤ 久間泰賢、1822/23 年「世界史哲学講義」におけるヘーゲルの仏教理解、前掲『ヘーゲルとオリエント』、査読無、2012 年、63-80 頁。
⑥ 栗原裕次、ヘーゲルとヘロドトス――哲学と歴史の邂逅――、前掲書、査読無、2012 年、115-127 頁。
⑦ 権左武志、ヘーゲルのエジプト論――特殊な主体性から普遍者の自覚へ――、前掲書、査読無、2012 年、109-114 頁。
⑧ GONZA, Takeshi, "Die europäische Neuzeit als Säkularisationsbewegung — Der Realisierungsprozess der Freiheit und ihre Begründung in Hegels Vorlesungen über die Geschichtsphilosophie 1830/31", in: Ch. Jamme / Y. Kubo (Hg.), *Logik und Realität : Wie systematisch ist Hegels System?*, Fink Verlag 2012, p. 259-275. 査読無。
⑨ 柴田隆行、ヘーゲルのインド論――理論と実証――、前掲『ヘーゲルとオリエント』、査読無、2012 年、53-62 頁。
⑩ 田中智彦、ヘーゲルとオリエンタリズム――西洋思想からの一考察――、前掲書、査読無、2012 年、129-145 頁。
⑪ 東長靖、ヘーゲルのイスラーム理解、前掲書、査読無、2012 年、93-107 頁。
⑫ 早瀬明、1822/23 年世界史哲学講義ペルシア論に於けるユダヤ教評価の転回――ヘーゲルのオリエント理解にF.Creuzerの及ぼした影響の一例――、前掲書、査読無、2012 年、81-91 頁。
⑬ 神山伸弘、ヘーゲル「世界史の哲学」講義（1822/1823 年）インド論の資料源泉をめぐるノート、『跡見学園女子大学人文学フォーラム』、査読無、9 号、2011 年、189－176 頁。
⑭ 早瀬明、ゾロアスター教の根本教義を巡るKleuker,CreuzerそしてHegel ： ロマン主義的なオリエント理解の枠組からの疎隔とZoegaからの影響、『京都外国語大学研究論叢』、査読有、78 号、2011 年、51-70 頁。
⑮ 早瀬明、1822/23 年の歴史哲学講義に於けるヘーゲルのゾロアスター教理解―その二 Creuzerの解釈の影響(一)、『京都外国語大学研究論叢』、査読有、76 号、2011 年、43-56 頁。
⑯ 神山伸弘、ヘーゲルによる〈インドの天文学〉理解――『歴史哲学』、1822/23 年「世界史の哲学」講義、グリースハイム・ノートの差異、『跡見学園女子大学文学部紀要』、査読無、45 号、2010 年、11-42 頁。
⑰ 権左武志、世俗化運動としてのヨーロッパ近代――一八三〇年度ヘーゲル歴史哲学講義における自由の実現過程とその基礎づけ、久保陽一編『ヘーゲル体系の見直し』（理想社）、査読無、2010 年、239-259 頁。
⑱ 早瀬明、1822/23 年の歴史哲学講義に於けるヘーゲルのゾロアスター教理解―(その 1)歴史的背景と資料源泉、『京都外国語大学研究論叢』、査読有、75 頁、2010 年、49-61 頁。

〔学会発表〕（計９件）

① 権左武志、ヘーゲルのロマン主義批判―受容から克服へ（シンポジウム「ヘーゲルとロマン主義」の一部）、日本ヘーゲ

ル学会、2011年12月18日、神奈川大学。

② 板橋勇仁、ヘーゲルとショーペンハウアーにおけるインド思想と無の評価（シンポジウム「ヘーゲルとショーペンハウアー：オリエントとニヒリズムの評価をめぐって」の一部）、日本ヘーゲル学会・日本ショーペンハウアー協会、2011 年 12 月 17 日、神奈川大学。

③ 田中智彦、ヘーゲル・ショーペンハウアー・オリエンタリズム（前掲シンポジウムの一部）、日本ヘーゲル学会・日本ショーペンハウアー協会、2011 年 12 月 17 日、神奈川大学。

④ 権左武志、自著紹介（合評会『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』の一部）、日本ヘーゲル学会、2011 年 12 月 17 日、神奈川大学。

⑤ 石川伊織、1822/23 年の「世界史の哲学」講義における中国の取り扱いについて（シンポジウム「1822/23 年の「世界史哲学講義」におけるオリエント論の研究――資料源泉との連関から見たヘーゲル・オリエント論の特質の解明――」の一部）、日本ヘーゲル学会、2011 年 6 月 19 日、お茶の水女子大学。

⑥ 神山伸弘、オリエントの事実認識から紡ぎ出される主観性発生にむけた実体性の内部プロセス――ヘーゲルのオリエント論がもつ特質の資料源泉からみた全体像（前掲シンポジウムの一部）、日本ヘーゲル学会、2011 年 6 月 19 日、お茶の水女子大学。

⑦ 権左武志、ヘーゲルのエジプト論――実体性倫理からの主体性の析出（前掲シンポジウムの一部）、日本ヘーゲル学会、2011 年 6 月 19 日、お茶の水女子大学。

⑧ 柴田隆行、ヘーゲルのインド論（前掲シンポジウムの一部）、日本ヘーゲル学会、2011 年 6 月 19 日、お茶の水女子大学。

⑨ 早瀬明、1822/23 年世界史哲学講義におけるヘーゲルのゾロアスター教理解――ヨーロッパ文化の基礎に向けられた発見の眼差し（前掲シンポジウムの一部）、日本ヘーゲル学会、2011 年 6 月 19 日、お茶の水女子大学。

〔図書〕（計２件）

① 神山伸弘編、神山伸弘（発行人）、『ヘーゲルとオリエント――ヘーゲル世界史哲学にオリエント世界像を結ばせた文化接触資料とその世界像の反歴史性――（科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）課題番号 21320008）研究成果報告書』、2012 年、755 頁。

② 権左武志、岩波書店、『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』、2010 年、393 頁。

〔その他〕

ホームページ等

http://www.atomi.ac.jp/~kamiyama/hegel/orient/kakenH23.htm

http://www.atomi.ac.jp/~kamiyama/hegel/orient/kakenH22.htm

http://www.atomi.ac.jp/~kamiyama/hegel/orient/kaken.htm

６．研究組織

(1)研究代表者

神山　伸弘(KAMIYAMA　NOBUHIRO)
跡見学園女子大学・文学部・教授
研究者番号：６０２３３９６２

(2)研究分担者

石川　伊織（ISHIKAWA IORI）
新潟県立大学･国際地域学部･教授
研究者番号：５０２９００６０

板橋　勇仁(ITABASHI YUJIN)
立正大学･文学部・准教授
研究者番号：３０３５０３４１

栗原　裕次(KURIHARA YUJI)
東京学芸大学・教育学部･准教授
研究者番号：４０２８２７８５

柴田　隆行(SHIBATA TAKAYUKI)
東洋大学･社会学部･教授
研究者番号：２０２３５５７６

田中　智彦(TANAKA TOMOHIKO)
東京医科歯科大学･教養部・准教授
（H23：研究協力者）
研究者番号：３０２８８０３９

東長　靖(TONAGA YASUSHI)
京都大学･大学院アジア・アフリカ地域研究研究科･教授
研究者番号：７０２１７４６２

橋本　敬司(HASHIMOTO KEIJI)
広島大学･文学研究科・准教授
研究者番号：４０２５３１２４
（H21→H22）

早瀬　明(HAYASE AKIRA)
京都外国語短期大学・キャリア英語科･教授
研究者番号：７０３１０６２３

(3)連携研究者

久間泰賢(KYUMA TAIKEN)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：６０３２４４９８

権左武志（GONZA TAKESHI）
北海道大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号：５０２１５５１３